



学校法人
鎌倉女子大学

学校と家庭が力を寄せ合って

― 初等部・中等部・高等部入学式式辞より抜粋

学校には負わなくてはならない主として三つの役割があるように思います。

一つは、家庭では培えない高度の知識や技術の修得です。殊に知識基盤社会といわれる21世紀では、幼少年期の教育内容も、相当高度なものになってきました。従って、専門職である教員が担わなくてはならない役割には、誠に大きいものがあるわけです。その為に、学校教育職員は、教えるべきことはしっかりと教えることが出来る確かな指導力を日々磨かなくてはなりません。

もう一つは、団体生活の訓練です。殊に少子化といわれる現代日本、現代家族に団体生活の訓練はなかなか期待出来るものではないでしょう。同年齢・異年齢との交わりは、言葉では培えない、毎日の生活を通して自然「社会性」が身につくものと思いますし、社会性とは、そのような生活体験を通じてでなければ、実際にはなかなか身につかないものなのです。

以上二つは、誰が考えても、明らかに学校が担うべき役割とあってよいでしょう。しかし、次の点は、政府の審議会等においても見落とされ、本格的にどうも議論されていないように思うのですが、学校に期待される第三の点は、「社会の原型を体験する場所としての学校」であります。

受験エリートとして偏差値の高い大学を出、優秀な成績を修め、一見何の問題もないように見える学生が、いざ就職してみると、上司からいろいろな命令を受ける、先輩から叱咤される、そうすると、もうヘナヘナと落ち込んでしまう。強いのは自意識ばかりで、自分は能力が高いのに、周りは評価してくれないと、3カ月ともたずに退職していく。そうした人が相当目につくようになってきているといわれるわけですね。これは、勉強が本当の「生きる力」に繋がってっていない、痩せた経験のまま大人になってしまっているのではないかと思うのです。全くの無菌状態の社会はありませんし、子どもたちは、晩かれ早かれ複雑に構成された社会に出ていかななくてはならないわけです。

無論、社会は、より善くなっていかなければならないわけですから、学校は、現実の社会の望ましくない部分は抜き去り、望ましい社会の建設に資する部分を提供出来るように心がけなければなりませんし、学校に子どもたちの未だ柔らかな心をスポイルしてしまうような大人の社会と全く同じような赤裸々な現実があってはなりません。また、人間として誠に卑しい行為であるイジメが、暴力があっては絶対になりません。

しかし、全く葛藤のない学校生活が理想の学校生活だと思ふのであれば、それは少し錯覚ではないかと思うのです。何か最近日本が無菌列島になることが望ましい社会だという

ような議論をよく聞くわけですが、よほど慎重に考えてみなければならないことだと思います。私達は、子ども達にいろいろな経験の橋を渡らせながら、逞しく成長させていかなくてはならないのだと思います。

他方、学校にこのような三つの大事な役割が期待されているということは、その裏返しとして、学校ではなかなか培えない、家庭でなければ養えないことがあるということの意味しているのだと思います。

人間としての最も基本的な考え方・善悪観・振舞い方、精神的な落ち着き、これは、是非ご家庭で培って頂きたいものと思います。ご両親が食卓で何に重きをおいてお話しになるのか、子どもたちは、それを無言のうちに日々眺めながら大きくなっていくわけです。これは、塩野七生さんの受け売りですが、「ローマの女の鑑」と讃えられた、グラックス兄弟の母コルネリアは、「子は、母の胎内で育つだけでなく、母親のとりしきる食卓の会話でも育つ^{*}」といったそうです。失礼ながら、ご両親が夫婦喧嘩をすれば、子どもは落ち着かなくなるわけで、勉強にも身が入らなくなるわけです。ファミリーの最大の使命は、子の教育にあり、家庭こそ、最も直接的で掛け替えのない教育の場なのです。

私の基本的な人生観・世界観は、学校の先生に教わったものよりも祖父や父から教わったものの方がはるかに大きかったと思いますね。その父が昔こういうことをいったことがありました。「親の年齢と子の年齢は同じだ」と。私達は、未完成・不完全なままに人の親となり、親も自分の子どもを手塩にかけて育てていく経験を通じて本当の親らしくなっていくのだと思います。思えば、そういった頃の父は、今の私よりはるかに若かったわけですから、私を育てながら思い迷うことも多々あったことに違いありません。

場合によると、ご両親自身が子育てに迷われることもあるかも知れません。本学には、専任の心理カウンセラーも配置しております。どうぞ、生徒諸君は元より、ご父母の皆様も、いつでもこうした先生方と気軽に話をする機会を作って頂ければと思います。みんなで支援の連携を保ちながら、よりよい教育の実現に取り組みたいものと思います。

※参照 塩野七生著『勝者の混迷』ローマ人の物語（第三巻） 新潮社。

[>前のページへ戻る](#)